十四世紀イランの風刺家オベイド・ザーカーニー

ハーフェズ研究の一プロセスとして[1]

佐々木あや乃

一　はじめに

ハーフェズ（一三二九?～九〇）は、ペルシア文学史上ガザル（抒情詩）の最高峰を極めた詩人である。現代イランさらにはペルシア語文化圏において、今なお深く愛されているこのハーフェズという詩人が展開させた、詩的世界にみられる社会の様相とその社会批判の精神を探究する過程において、オベイド・ザーカーニーという詩人かつ風刺作家に注目する必要がある。

その理由としてまず第一に挙げられるのは、ハーフェズもオベイド・ザーカーニーも、共に同時代の宮廷詩人という側面を持ち合わせているということである。具体的には、オベイド・ザーカーニーが頌を捧げた四人の為政者・大臣はいずれもハーフェズの称賛の対象でもあったということである。さらに、ハーフェズのパトロンとして名高い、インジュー家のアブー・イスハーク王への頌は、数の上ではオベイド・ザーカーニーの方がはるかに勝っており、彼ほどこの王を熱心に讃えた詩人はいなかったという事実が明らかになったのである。したがって、この王の時代の社会状況――すなわちハーフェズの目にした社会状況――の研究を試みる過程では、このオベイド・ザーカーニーのカスィーダ（頌詩）研究は必須の要素なのである。

オベイド・ザーカーニーに注目すべき第二の理由は、ハーフェズの生きた一四世紀のイラン南部ファールス州シーラーズという町で、ほぼ同時期に生活していた一人の人間として、その社会にハーフェズと同様の憤りをおぼえ、言葉という手段とりわけ社会風刺という斬新な表現方法によってその感情を巧みに表現した文人であるということである。ハーフェズ研究のうえで、当時の社会に横行していた慣習や倫理観を客観視するハーフェズの視点を意識する時、同じ時空間で同じ感情を共有していたと判断できうる、いま一人の文人の存在は非常に大きいのである。

この論考では、ハーフェズ研究の過程で全く新たに生まれた「オベイド・ザーカーニーとハーフェズとの比較研究」を試みることを主眼とする。すなわち、ハーフェズとオベイド・ザーカーニーとの共通点に注目し、特にオベイド・ザーカーニーの才能が存分に発揮されたと評価の高い社会批判の手法については、ハーフェズの作品と比較しながら、検討を試みることを目的とする。

まずはじめに、オベイド・ザーカーニーの人物及び作品紹介をしておくことにしよう。

二　オベイド・ザーカーニーの生涯と作品

1　出自、名前

オベイド・ザーカーニーについては、従来より『選史 *Tārikh-e gozīde*』、『詩人伝 *Taẕkeratosh-Sho'arā*』、『賢人たちの園 *Riyāẕol-'Olamā'*』といった資料、及びオベイド・ザーカーニー自身の残した作品が参考とされてきた。[2]

『選史』によると、オベイド・ザーカーニーはザーカーン一族の出である。ザーカーン一族というのは、皮膚の色が浅黒く、現イラク国境に近いキャルヘ川流域の町であるスーサンゲルド[3]（イラン南部アフヴァーズの北西約七五㎞）の出身である。この一族はガズヴィーンに移住、さらにファールスへと移り住んだようである。一族は、神学をはじめとする学問の世界に生きる人々と、政界で活躍し大臣や主席といった高職に就いた人々との二派に分かれる。この後者のザーカーン一族の中にオベイド・ザーカーニーの名前が見られることより、主席や大臣クラスの地位についていたであろうと推測される。しかしながら、正確な役職や仕えた王の名前等、詳細は一切不明である。『選史』が編纂されたのがA.H.七三〇／一三二九年であるため、その年には既に要職についていただろうと推定され、またその要職についてからおそらく四〇年は存命だったであろうと通常考えられている。

また、名前については、ナーセロッディーン、ナジュモッディーン等の諸説があったが、本名がオベイドッラー、詩人として用いた雅号がオベイドであることが判明している。[4]

オベイドの残したカスィーダの中に「ファールスに来て一二年、窮乏生活を送っている。運命はつれない」と嘆いた作品が残っており、[5]金銭的に恵まれた生活を送っていなかったらしいということがうかがわれる。

没年については明らかではない。天文学書である『果実と枝の書 *Ketāb-e asmār o ashjār*』の写本の最初のページの裏と同書の最後のページに残されたオベイド・ザーカーニー自身のサインから、A.H.七六七年モハッラム月二一日／一三六五年には存命であったことが確認されている。また、オベイド・ザーカーニーがモザッファル朝のシャー・ショジャーのイスファハーン征服に際し祝辞を送っており、[7]これはA.H.七六八年ズィーハッジャ月一七日／一三六七年の出来事であることより、この時オベイド・ザーカーニーが存命していたことも明白である。さらに、オベイド・ザーカーニーの所有物であった上記の天文学書『果実と枝の書』の最初のページには、この書がA.H.七七二／一三七〇年にオベイド・ザーカーニーの息子イスハークの手に渡ったというイスハーク自身の筆跡が残っていることより、オベイド・ザーカーニーはA.H.七七二／一三七〇年には亡くなっていたことが確認できる。したがって、A.H.七六八年から七七二年の間（一三六七年から一三七〇年の間）に亡くなったのではないかと推察されるのみである。

2　作品

次に、このオベイド・ザーカーニーの残した作品をみていくことにしよう。風刺作家としてのみ認識されることの多いオベイド・ザーカーニーは、実は韻文・散文を問わず、数多くの作品を残している。

通常、オベイド・ザーカーニーの作品は真面目で堅い作

品と風刺作品に大別することができ、さらに各々が韻文と散文とに分類される。

2・1　真面目な作品

ここで「真面目な」と表現したのは、ペルシア語の jedd（本気、真面目）の訳語である。その内容は、時の支配者や権力者への頌、教訓・倫理を説くもの、心情吐露といった、当時までのペルシア詩の題材となったものおよそすべてを含むと考えてよい。

2・1・1　韻文作品

オベイド・ザーカーニーの真面目で堅い韻文作品は、カスィーダ（頌詩）[8]、ガザル（抒情詩）[9]、カトエ（断片詩）[10]、タルジーバンド、タルキーブバンド（いずれも連詩）[11]、ルバーイー（四行詩）[12]、マスナヴィー（叙事詩）と多岐にわたって残っている。各々の特徴を簡単に紹介しておこう。

カスィーダは、パトロンへの頌の表現手段として従来から用いられていた詩形であり、オベイド・ザーカーニーも、ハーフェズの最初のパトロンとして名高い、インジュー家のシャー・シェイフ・アブー・イスハーク王への賛辞をこめたカスィーダを全体の約三分の二の二八作品うたっている。ハーフェズがこの王を讃えた詩はカスィーダはわずかに一作品[13]、その他ガザル二作品[14]とカトエ二作品[15]を合わせても計五作品のみであることから、ハーフェズよりもオベイド・ザーカーニーこそがこの王の特別な称賛者であったとみなされてしかるべきなのである。

ガザルについては、一三世紀のガザルの巨匠サアディーに憧れていた形跡がうかがわれるものの[16]、凡庸な作品が大半を占める。

カトエには、詩人の生活ぶり、考え方等が最も強く反映されている。浪費家で、放蕩三昧の生活を送り、恋に溺れやすかったという内容がしばしば描かれ、政治的要職にいたにもかかわらず、常に困窮状態にあり、借金に追われていたオベイド・ザーカーニーの姿が映し出されている[17]。

タルジーバンドの内容は称賛ではなく、「時は金なり」というメッセージがこめられている[18]。一方のタルキーブバンドは、預言者・カリフを讃えたり、王や大臣に賛辞を送る内容となっている。

ルバーイーの内容は教訓、恋人の描写、別離に対する不満、酒への賛辞、寒さと窮乏、老いへの不平等々、多岐にわたっている[19]。

マスナヴィー作品には、四ベイト、三〇ベイトという比較的短い作品のほか、七三四ベイトにものぼる『恋人たちの書 *'Oshshāq-nāme*』という長編詩が残っている[20]。オベイド・ザーカーニーがアブー・イスハーク王の名において、僅か二週間でA.H.七五一年ラジャブ月二日／一三五〇年にうたいあげたとされているこの作品には、マスナヴィーと同じ韻律をもつガザルが三四ベイト組み込まれており、これは当時としてはたいへん斬新な手法であった。同時代の詩人、サルマーン・サーヴェジー[21]にも影響を与えたほどである。長い序の後、恋する者 'āsheq が相手 ma'shūq に自らの心境やその愛の清らかさを説くスタイルで描かれ、登場人物は恋する者、その対象、二人の間をとりもつ使者 qāṣed、そして四人目として恋のライバル doshman または khaṣm の存在が特徴的である。にもかかわらず、『恋人たちの書』の評価はあまり高くない[22]。一三世紀のニザーミーやイン

ド・ペルシア詩人として名高いアミール・ホスローの『愛の書 *'Eshq-nāme*』と比較すると、物語の面白味に欠け、表現方法もその魅力に欠けるというのがその理由である。[23]

2・1・2　散文作品

真面目な作品のうち、散文はアラビア語で書かれた『逸話集 *Navāderol-Amṡāl*』一作品が残るのみである。これは、スルタン・アブー・サイードの大臣ハージェ・アラーオッディーン・モハンマドに献呈された作品であり、オベイド・ザーカーニーの初期の作品といえる。しかし、彼自身の創作ではなく、当時伝わっていた金言や寓話等をオベイド・ザーカーニーが編纂したものである。彼のユーモアや風刺を解するセンスで、材料を集め、古めかしい言葉に新しい息吹を吹き込みそれをまとめ上げたという点では、大いに評価されるべき作品といえよう。

しかしながら、この作品の写本は世界にわずか二点しか存在せず、ウィーンにある一点は半分収録されているのみ、大英博物館にあるもう一点は、オスマン・トルコ語、アラビア語、ペルシア語の文字のみをかろうじて知っている者が「まるで絵を描くように」写したようで、間違いや抜け落ちが多く、資料としての価値はないとされている。[24]

2・2　風刺作品

真面目な作品同様、韻文と散文に分類できる。ここでは、オベイド・ザーカーニーの作品であることが確実とされているもののみに言及することとする。[25]

2・2・1　韻文作品

タルジーバンド、[26]マスナヴィー、[27]ルバーイー、[28]カトエ[29]が確認されている。社会批判や皮肉のほか、フェルドゥスィー、ニザーミー、サアディーといった、ペルシアの五大詩人として数え上げられるほどの先人の詩句を引用・挿入する手法タズミーン tazmīn が多用されている点が特徴的である。風刺の韻文全体のベイト数は合計三七〇である。

しかしながら、オベイド・ザーカーニーの冗談・戯れ言中心の韻文は、優美さに欠け、下品であまりにあからさまであると感じられ、時に読者に嫌悪感すら催させると言われており、決してオベイド・ザーカーニーの価値を高める結果にはなっていないといえる。[30]

2・2・2　散文作品

ペルシア文学史上、散文で社会風刺を行ったのは、オベイド・ザーカーニーが最初である。それゆえ、オベイド・ザーカーニーの名を世界に轟かせ、社会批判の第一人者に押し上げたのは、この風刺散文作品であるといえよう。代表作として五つの作品を挙げておこう。[31]

①『貴族の倫理 *Akhlāqol-Ashrāf*』[32]

マフジューブ氏が絶賛する、最も重要な散文作品である。極めて正確かつ鋭い視点で当時の社会の不条理や醜さを描き、それを批判した点で高く評価されている。序の一部を訳出してみよう。

…今の時代は、かつての時代・世紀の凝縮といった感がするが、貴族たちは上品かつ機知に富むようになり、思慮に富んだ偉人たちも見受けられる。清らかで確固たる思想が、現世・来世を問わず考えられるようになり、旧い慣習やしきたりは、そういう方々の識別ある目には卑しく根拠のないものと映っている。時の経過とともに大方のその規範は消失し、それを再び人々に思い起こさせるには高い代償がつく。よって貴族たちは、かつての倫理やしきたりを勇敢に大志を抱いて踏みつけ、目下貴族たちの間で流布している方法で、自らの現世・来世委の御利益のために着手し、宗教的・世俗的な事柄の基礎をその上にしっかりと打ち立てたのである…[33]

重厚かつ格調高い表現方法をとりながら、皮肉はたっぷりこめられており、オベイド・ザーカーニーの社会に注がれる視線の鋭さが十二分にうかがわれる文章である。

全体は七章から成り[34]、当時のウラマー[35]を辛辣に批判した第六章が最も高く評価されている。

②『楽しき論文 *Resāle-ye delgosha*』[36]

一番の長編作品である。アラビア語の八四の逸話・金言と、ペルシア語の二四五の物語から成る二部構成となっている。ペルシア語の逸話一四〇の次に、突然「托鉢僧たちの書簡」[37]と名付けられた書簡一通とその返事一通が挿入され、その後再び逸話一四一が始まる。王、大臣、カリフ、ウラマー、偉大な文人、イスラーム法学者、スーフィー、哲学者、詩人、書家、托鉢僧、裁判官、音楽家、英雄、道化師、夜警、名の知られた女性等々の名前を具体的に示しており、そのうえで時に言及しかねるほどの下品な逸話を各個人と関連づけてしまっている点は、文人として評価できる姿勢ではないといえよう。

③『百の忠告の論文 *Sad pand*』[38]

百の忠告の最初の五つの忠告は以下の通り至極真面目なものである。

愛しい者たちよ、人生を大切にせよ。
時を失うことなかれ。
王位にあることと意外な授かりものと恩寵は、健康と安全の中にあると知れ。
時間通りにあれ、人生は二度と戻ってはこないのだから。
辛い時には、それを人生の時間のうちにみなすでない。[39]

しかしながら、残りは冗談・戯れ・ジョーク、そして時には下品な内容となってしまっている。

④『十章 *Dah faṣl*』（別名『定義 *Ta'rīfāt*』）[40]

短い、辞典風の構成で十章から成る。この書が社会批判を目的として著されたことは、一目瞭然である。数例を挙げてみよう。

現世とは、いかなる創造物もそこでは安らぎ得ない場所。
賢者とは、現世や俗人に気づいていない人。

寛大な人とは、人々の地位や財産を欲しがらない人。
男とは、偽善を語らぬ人。
思想とは、人々を意味もなく病ませるもの。
学者とは、生計をたてる知恵のない人。[41]

的確な指摘かつ読者を苦笑させる定義が、実に言い得て妙である。

⑤『顎髭の論文 *Resāle-ye rīsh/ Rīsh-nāme*』[42]

ユーモア・ジョークに満ち、笑い話として楽しむことのできる内容である。顎髭に人格を与え、詩人と顎髭との対話で本文が綴られていく。少年時代の美しさが顎髭によって失われていくこと、髭の存在が人々に敬意を払わせること等が語られている。

三　宮廷詩人としてのオベイド・ザーカーニー

オベイド・ザーカーニーが数多く、幅広い作品を残し、その作品の中にパトロンに捧げる頌が多く見られたことは二の2・1・1で見てきた通りである。ここでは、そのオベイド・ザーカーニーの「宮廷詩人的側面」に焦点を当てることとする。

宮廷詩人的側面として、ハーフェズとの共通点としてまず挙げられるのは、その称賛の対象となったパトロンたちの一部が完全に一致しているという点である。インジュー家のシャー・シェイフ・アブー・イスハークをはじめとし、彼の大臣であったロクノッディーン・アミードルモルク、モザッファル朝のシャー・ショジャー、そしてジャラーイェル朝のスルタン・オヴェイスは、歴史研究において、あるいはハーフェズのパトロンとしてのみ、注目されてきた時の権力者たちである。ところが、まさにこの四人の時の権力者には、オベイド・ザーカーニーも賛辞を捧げていたのである。

アブー・イスハーク王は、A.H.七四二／一三四一年にシーラーズを征服し、ハーフェズの有名なパトロンとして広く知られている。この王に対して、オベイド・ザーカーニーもカスィーダを二八作品うたっている。史実に言及したものはごく僅かであり、大半は純粋に王を讃える内容となっている。この他、この王に捧げられた『恋人たちの書』はA.H.七五一／一三五〇年の作であることが明らかであることより、この当時おそらくオベイド・ザーカーニーはこの王に仕えていたと考えられる。また、A.H.七五四／一三五三年にこの王が建てた宮殿に言及したマスナヴィー、[43]カトエ[44]も残っている。王の最期（A.H.七五八／一三五七年）に言及したカトエは、華やかかりし佳き時代を偲びつつ栄耀栄華の脆さ・はかなさをうたった作品である。[45]その他この王への賛辞が織り込まれたタルキーブバンドも一作品残っている。[46]

ロクノッディーン・アミードルモルクは、アブー・イスハーク王の大臣職にあった父親が殺害されたA.H.七四六／一三四五年頃から、父親に代わって同王の大臣として重用され始めたと考えられている。三つのカスィーダ[47]のうちの一つは、組閣の祝辞を述べたものであり、残りの二つでは、オベイド・ザーカーニー自身がこの大臣に仕えていることが示唆されており、一箇所では一〇年以上、別の箇所では一二年出仕していると記して

いる。さらに、一つのタルキーブバンド[48]、三つのカトエ[49]においてオベイド・ザーカーニーはこの大臣に称賛の辞を述べている。この大臣自身も詩人で学識豊かな人物だったことより、オベイド・ザーカーニーを長期間側においたとも考えられよう。

ジャラーイエル朝のスルタン・オヴェイスとオベイド・ザーカーニーとの接点は上記の三人ほど明確ではない。想像の域を超えないものの、スルタンが一度もシーラーズを訪れてはいないことから判断すると、オベイド・ザーカーニーがアブー・イスハーク王亡き後バグダードへ旅した際に、スルタン・オヴェイスの宮廷詩人であったサルマーン・サーヴェジー[50]に会い、詩の愛好家として知られていたこの王の御前で頌を披露することになったのではないかと考えられている。カスィーダ三作品[51]、タルキーブバンド一作品[52]が残っている。

オベイド・ザーカーニーは晩年に、シーラーズもしくはケルマーンで、最期までモザッファル朝の王シャー・ショジャーに仕えたとされる。この王へはカスィーダ二作品[53]が捧げられている。うち一作品では、オベイド・ザーカーニーがシャー・ショジャーがいたケルマーンに出向いたことがうたわれている。これはA.H.七六六ー六七／一三六四ー六五年の出来事とみなされている。二つ目のカスィーダは、A.H.七六八年ズィーハッジャ月一七日／一三六七年にはシャー・ショジャーがイスファハーンを平定した時の作品で、オベイド・ザーカーニーは現地イスファハーンで王に直接祝辞を述べている。

ハーフェズと共通の保護者ではないものの、いま一人の重要なオベイド・ザーカーニーのパトロンとして、スルタン・アブー・サイードの大臣ハージェ・アラーオッディーン・モハンマドがいる。オベイド・ザーカーニーがこの大臣に自らの唯一の真面目な散文作品『逸話集』を献呈しているのは、前に述べた通りである。直接賛辞を述べてはいないものの、『楽しき論文』の中にこの大臣についての記述がある。オベイド・ザーカーニーがいつどこでこの大臣に会ったのか、詳細は不明である。史実と絡めて推測する限りでは、この大臣がA.H.七二七／一三二七年に大臣職に任命されてからホラーサーンに派遣される直前の数ヶ月というごく短期間に出会ったと考えられる。ちょうどシーラーズが生んだ恋愛叙事詩の巨匠サアディーの死後三〇から四〇年が経過し、ハーフェズが同じシーラーズで幼少期を過ごしていた時期である。ちょうどこの頃にオベイド・ザーカーニーの詩人・文人としての活動が始まったと考えられる。

以上、オベイド・ザーカーニーの宮廷詩人的側面を概観してみた。ここで一つの疑問が頭をもたげてくる。すなわち、「ハーフェズとオベイド・ザーカーニーは常識的に判断すれば、どこかでこの二人は顔を合わせていた、あるいは少なくとも互いを見識っていたのではないか」という疑問である。

残念ながら、オベイド・ザーカーニーの作品の中でハーフェズについて言及したものは皆無であり、またその逆もしかりである。しかし、韻文作品を丹念に見ていくと、ガザルに長けていたハーフェズのガザルの韻律・脚韻とよく類似したガザルをオベイド・ザーカーニーが作っていることは明らかである。よって、少なくともどちらかが一方も念頭におき、意識していたことは確実であろうと考えられるのである。

四　社会批判者としてのオベイド・ザーカーニー
――ハーフェズとの比較――

次に、社会批判者としてのオベイド・ザーカーニーの姿に焦点を当ててみることにしたい。ここでは、ハーフェズの作品も引用しながら、この二人の文人が当時の社会に何を見、何を感じ、それをどう表現したのかを追っていくことにする。

1　さまざまな社会階層に対して

ハーフェズもオベイド・ザーカーニーも、当時の様々な社会階層に対して、厳しい批判の目を注いでいる。以下、イマーム、説教師、スーフィー、シェイフという当時の社会における代表的な階層について、具体例を挙げながらみていくことにしたい。

①イマーム

イマームとは、イスラームの宗教指導者のことであり、集団礼拝の際に礼拝者たちの最前列で手本を示す人を指すのがその一般的な姿である。

まず、ハーフェズはイマームをどう観察し、表現しているであろうか。

今日人々がイマームを求めたら、彼らに告げよ
「ハーフェズは酒で身を清めた」と
（ガザル一二八）

イスラームが大きな影響をもっていた当時、飲酒は当然禁止された行為である。ここで、ハーフェズが「酒」と表現したものが本当の酒なのか、あるいは「酒」は神へ到達するために陶酔の境地に入るための手段をさすものなのかといった議論は、研究者の間で長く論じられ続けている大きな問題であるゆえ、ここでこの問題に深入りすることはしない。しかしながら、一つの解釈として、「ハーフェズは酒で身を清めてしまった、すなわち飲酒行為に及んでしまったのだから、当然イマームというイスラームの宗教指導者にはなれない」という意味に解することができる。「イマームが酒を飲んだ」のではなく、「飲酒行為に及んでしまったハーフェズにはイマームたる資格はない」と婉曲的な表現をしているのである。

昨夜、酒場の小路から背負われ、かつがれていったのは
礼拝の敷物を肩にのせたご立派なイマーム
（ガザル二七八）

このベイトでは、当時のイマームの二面性――すなわち人前で「イマーム」であり敬虔で礼拝の敷物を片時も離さないような人物が、実際には泥酔し他人にかつがれて運ばれていったという事件――を庶民にもわかるように平易に描写している。

一方のオベイド・ザーカーニーはイマームをどう観察しているのであろうか。

イマームとは、見せかけの礼拝をするもの
（『十章』より第六章）

表現手段として散文を用いていることが大きな原因と考えられるが、言葉に余韻はなく、イマームの狡猾さを断言する形式をとっている。ハーフェズと同じ現象を表現しておきながら、言葉から受けるニュアンスの違いを見せつけられると同時に、あからさまな表現に危険な鋭さを感じざるをえない。

②説教師 vāʿeẓ, khaṭīb

説教師 vāʿeẓ（ヴァーエズ）とは、会合や君主の面前などで説教をする者であり、とりわけ宗教的な警告を強調するのがその特徴である。

ハーフェズはその全ガザルの中で一五回も説教師に言及している。そのうち、最も目を引くのは、説教の内容と説教師自身の行為が矛盾していることを指摘する内容である。以下の二つがそれである。

町の説教師には容易なことでないとしても
偽善と欺瞞を行うかぎり、真のムスリムにはなれはしない
（ガザル二二〇）

メヘラーブ[55]や説教壇で威厳を示す説教師たちは
人目のないところではほかのことをする
（ガザル一九四）

説教師は偽善と欺瞞に満ちた行動にすっかり慣れきっており、世間の目を気にせずに済む場所では、人々に説く教えとは全く異なった行動にでると説明している。

また、説教師の説教は、民衆を死の恐怖にいたずらに陥れるだけであり、内容は信頼できるものではないということも指摘している。次のベイトがその好例である。

町の説教師が語る最後の審判の恐怖の話は
別離の時を物語る暗示だ
（ガザル八八）

こうした説教師の態度・行動の矛盾を中傷したり、陰口としたりするのはハーフェズの人生のモットーに最も反するやり方である。説教師を「真理の香りを嗅ぐことのない人」と表現することによって、やんわりとした印象をもたせつつも毅然とした態度でのぞむ自らの姿勢を示しているのが、次の詩句である。

われらが説教師は真理の香りを嗅がなかった、聞け
私はこのことを彼の面前で言おう、陰口はたたかない
（ガザル三四四）

そして、ハーフェズは語調を強めてこう告げるのである。

説教師よ、私の許を去れ、ばかげたことを言うな
私は二度と偽善に耳を傾けはしない
（ガザル三三九）

ハーフェズが幼少の頃、アブー・モハンマド・マンスール・ラー

ストグーイ Abū Moḥammad Manṣūr Rāstgūy という年老いた説教師・隠者がいた。モスクではかなり激しい説教をし、時の権力者たちを脅迫・懲罰するかのようだったという。[56] ここに例として取り上げたいくつかの表現は、まだ幼かったハーフェズの脳裏にこうした出来事が深く刻み込まれていた結果とも考えられよう。

では、一方のオベイド・ザーカーニーの言葉はどのようであろうか。説教師に関しては、まずタルジーバンドの第四節にある次のフレーズが目に留まる。

われらは高慢な説教師たちを否定する
われらは偽善のかたまりのシェイフらの敵

シェイフ（後述）と共に、説教師は自分とは相容れない、いわば「敵」であることを断言している。いきなり完全に否定される存在である説教師は「高慢」であり、オベイド・ザーカーニーが自らの敵と考えていることは、誰の目にも明らかである。よって、彼の下した定義は次のようになっているのである。

説教師（ヴァーエズ）とは、有言不実行の人
（『十章』より第三章）

民衆には説教をして、来世の恐ろしさも説いておきながら、自分では「恵まれた」来世が訪れるような行為には及ばないという矛盾を抱えた人、それが説教師なのだと明白に定義しているのである。

オベイド・ザーカーニーの次に挙げたルバーイーには、「説教師」という意味のもう一つの語、ハティーブ khaṭīb が見られる。ハティーブはヴァーエズと比べて、より一般的な説教師である。

ヒズルの泉[57]より石でできたワイングラスの方がいい
説教師（ハティーブ）の説教より竪琴のさざめきの方がいい
レンド[58]が酔っ払おうと努める激しさの方が
シェイフ面する者の叫びよりずっとましし
（ルバーイー三三）

永遠の生命よりも今酔えるワインを、小難しく恐ろしげな説教より宴の楽の音を求める内容である。この種の内容は、ハーフェズのガザルにも多々見られる。ただ、第二句の調子がかなりファナティックになっており、これは決してハーフェズのガザルには見られない、いわばオベイド・ザーカーニーの特徴とでもいうべきスタイルである。よって、説教師は次のように定義されてしまうことになるのである。

説教師（ハティーブ）とは、愚か者（『十章』より第三章）

他の解釈の余地は全く残されておらず、定義づけられた側である説教師たちからの不満の声があがったと仮定した場合、オベイド・ザーカーニーが自己弁護する余地も残ってはいない。あまりに辛辣すぎる表現といえるのではないだろうか。

③スーフィー

スーフィーは、アッラーとの合一をめざして、清貧に生き修

行に励む人々であえる。しかし、一四世紀シーラーズのスーフィーは、このスタイルからは外れていたようである。ハーフェズのガザルにさまざまな形で計三九回登場する言葉であり、ハーフェズの関心の高さがうかがえる。

最初に挙げた詩句は、スーフィーとその対極に位置する「レンド」の図式が明確に浮き彫りにされている。神（真実）に近づくことのできる存在は、社会で高い地位を占めるスーフィーではなく、本当はレンドなのだと告げているのである。

さあスーフィーよ、グラスは鏡のように澄んでいる
　ルビー色のワインの清らかさを見よ
帳の内にある秘密を酔ったレンドたちに尋ねよ
　高位のスーフィーにこのすばらしさはわからない
（ガザル七）

なぜ一見して無頼の徒のように見える「レンド」が真実を知る者なのか。ハーフェズは「スーフィーは人々を欺く存在である」ことを見抜いているのである。そして、外見も内面も飾り気のない、自分の感情や信念に忠実な「レンド」の方が、人間としてはスーフィーよりも格が上であると判断したのである。スーフィーの欺瞞・狡猾さをハーフェズは美しくも皮肉をこめた表現で次のように描写している。

スーフィーは罠を仕掛け、欺瞞の小箱をひもとき、
　狡猾な天輪さえも騙し始めた
（ガザル一二九）

そして、スーフィーに対し、時に毅然と「偽善をやめよ」と声を大にして呼びかけることすら行うのである。

さあスーフィーよ、偽善の弊衣を脱ぎ捨ててしまおう
　この偽善の徴に取り消しの線を引いてしまおう
（ガザル三六八）

では、これほどまでにうたわれているスーフィーの「偽善」とは何であろうか。スーフィーの語源がアラビア語で羊毛を意味する「スーフ」とされることより、当時、スーフィーはぼろを着て修行に励んでいたのが一般的であったと考えられる。外見上はぼろを纏い、修行にいそしむように見せかけておきながら、人目を忍んでは現世の快楽に手を出すといった彼らの行為は、ハーフェズには許し難いものであったのである。次のベイトは皮肉と解釈する人もいるであろうし、酒を陶酔の境地に至ることと解釈する人もいるであろう。しかし、ハーフェズの「人間のもつ矛盾」に注目する姿勢を考慮すると、スーフィーの中でも、自らの欲望に正直に振る舞う者の方が、無理をして庶民を騙す者よりも結果的に賢明であると説いているという理解もできよう。

昨日ワイングラスを壊していた狂気のスーフィーは
　酒を一口飲んですっかり賢くなった
（ガザル一六五）

そして、次のベイトでは、スーフィーが飲み代としてスーフィーの象徴である弊衣を酒売りに託すという行為が、当時実際に行われていたことを示すと同時に、「酒売り」という、当時（当然）異教徒であるがゆえに社会的身分が決して高くなかった人々でさえ、本来尊敬されるべきスーフィーたちが、体裁を取り繕うための身に纏う弊衣を持参しても、それが全く価値のないものと知ってしまった以上、人を陶酔の境地に誘う酒というありがたい品を渡すことはしないであろうと語っていると解釈することができる。

酒売りたちがわが考えを知れば
これ以後スーフィーの弊衣を抵当には取らないだろう
（ガザル一八八）

一方のオベイド・ザーカーニーの表現をみてみよう。

スーフィーとは、決して腹一杯にならない人のこと
（『十章』より第四章）

スーフィーが大食家であったことを示唆すると解釈できるほか、何事にも決して満足しない、つまり現世の欲望を限りなく追求し続けている人々であると解することもできよう。今与えられているものに決して満足せず、さらに求め欲する姿は、神との合一を目指して修行に励むという清貧な姿とはあまりにかけ離れているとオベイド・ザーカーニーの眼には映ったに相違ない。ハーフェズと共通の視点を持っていた証しである。スーフィーに対しては、次のような事実の暴露も行っている。

麻薬とは、スーフィーたちを有頂天にさせるもの
（『十章』より第八章）

スーフィーが麻薬を愛用していたという事実である。ハーフェズのように韻文で、何かを象徴するといった意味合いをもつ表現方法をとっていない以上、麻薬とスーフィーとの密接な関係の暴露と思われてもいたしかたあるまい。たとえ、陶酔の境地に至る補助手段として、麻薬が用いられることが常套化していたとしても、本来のスーフィーのあるべき理想の姿でないことは誰の目にも明らかである。こうした事実を平易な散文で述べたオベイド・ザーカーニーの表現は、ハーフェズのそれより明らかに直接的かつ端的な言い回しであることは否めないのである。

④シェイフ

シェイフとは、長老、年輩者という意味である。敬意の対象となる人に対する呼称にもなるため、スーフィーやウラマーに用いられることもある。

ここでもまず、ハーフェズの表現をみてみよう。

最後の審判の日にシェイフのハラールのパンが
われらのハラームの水に勝ることはあるまいに
（ガザル一一）

ハラールとはイスラーム法からみて合法で許容されたもの、ハラームはその逆でイスラーム法で禁止されたものをさす。シェイフたちは偽善にまみれた生活を送っているが、われらは自分に正直に生きているのだから、神は彼らのパンより我らの酒を正当に評価してくださるにちがいないという意味に解釈できる。

ハーフェズはそのガザルの中で一九回、シェイフという語を否定的な意味で用いている。詩的世界の中では、自分とは対極に位置し、決してわかりあうことのできない像として描いているのである。以下の例がその好例である。

わが遊蕩ぶりを言いふらしたのは
無知な長老たちや迷えるシェイフたち
（ガザル四〇九）

非難の矛先を「わが遊蕩ぶり」といった表現によって自分にも向けることにより、シェイフたちのみを攻撃する結果には至っていない、ハーフェズの知恵者ぶりがうかがわれる表現である。

このシェイフたちは、ハーフェズの眼から見れば、神を識りうる段階にはまだ達しておらず、達し得ないことは確かである。次の例をみてみよう。

神を識る人々のしるしは愛すること、大切にせよ
町のシェイフたちにこのしるしは見られない
（ガザル三五〇）

ハーフェズの賢明な点は、「シェイフは神を識らず」とは公言することをせず、「愛」というクッションをおいてうたう点である。よって読者・聞き手に強烈な印象を与えずに済むのである。

では、オベイド・ザーカーニーのシェイフへの眼差しはどのように注がれているのであろうか。珍しく、韻文作品であるルバーイーにシェイフへの言及がみられる。

おおシェイフよ、体から切り離されたお前の頭が欲しい
お前の命は不幸の矢の標的であって欲しい
何の報いもなく全知の神を求めているのだから
私はお前の死を神に嘆願しよう
（ルバーイー五〇）

韻文という体裁をとっていながら、内容は強烈で激しいものである。シェイフの死と不幸を切に望んでいることは明らかであり、さらに「何の報いもなく全知の神を求める」シェイフのあり方を鋭く批判する結果となっている。

さらに、オベイド・ザーカーニーの下したシェイフの定義は次の通りである。

シェイフとは、悪魔（『十章』より第四章）

読者や聞き手が別の解釈をさしはさむ余地を全くもたない表現であり、オベイド・ザーカーニーがシェイフに対して敵意や憎悪の念を抱いていることは、誰の目にも明らかである。実に激しく、また正直で本音を隠さない人である。

もう一つ、シェイフへの言及がある。

道に迷ったり地獄に落ちたりせぬよう、偽善者たるシェイフたちの話を信じるな（『百の忠告』より）

「シェイフの言葉を信じれば、道を見失い、地獄に落ちてしまう」という警告にも似た文である。

シェイフに関して、オベイド・ザーカーニーの言葉から受ける印象はあまりに強烈である。激しい怒りや敵対心に裏打ちされた言葉であることに疑問をさしはさむ余地は全く見られない。

以上、ハーフェズとオベイド・ザーカーニーという同時代に生きる文人各々の、いくつかの社会階層に対する表現をみてきた。ハーフェズは、ガザルという従来から一般的に親しまれてきた韻文を用い、オブラートにくるみ、意味に重層性をもたせ、読み手・聞き手によってさまざまに解釈できうるような表現をしているのに対し、オベイド・ザーカーニーは、韻文だけに限らず、風刺を散文で表現するというかつてない手法をも用いた点は評価に値するとしても、非常に直接的かつ辛辣な物言いをしている。二人の表現の差異が明白に浮かび上がったことと思う。と同時に、二人が当時の社会に感じていた憤り、すなわち社会の腐敗、社会にはびこる欺瞞や偽善がクローズアップされていることは強く印象づけられたはずである。[59]

そこで次の項では、欺瞞・偽善といった言葉を中心に、この二人が感じていた当時の社会倫理に注目して、二人の表現を比べていくことにする。

2　社会道徳、とりわけ欺瞞・偽善（者）に対して

詩作という行為は、ある出来事に遭遇した際の詩人の感情が動機付けとなるものである。美しい自然を見て驚愕し感動をおぼえる、あるいは最愛の人の死に直面してその深い悲しみを表す、といった例を挙げることができよう。

ハーフェズのガザル全体を通して、ハーフェズの詩作の動機となり、最も強く前面に押し出されている感情は、前項四の1で見てきたように「欺瞞・偽善に対する憤怒」である。ここでは、ペルシア語で欺瞞・偽善を示す sālūs, riyā, tazvīr kardan という言葉が用いられているフレーズを具体的に取り上げることとする。

最初の例を見てみよう。

わが心は庵と偽善の弊衣にうんざり
ゾロアスター教徒たちの寺院は何処、上等な酒は何処
（ガザル二）

「偽善」を「弊衣」に例えていることから、読者の脳裏にはスーフィーの姿が思い浮かぶはずである。庵というのは、神秘主義修行僧たちの修行の場であるが、ハーフェズにとってはスーフィーたちのような偽善の徒の集う場所であり、自身からは最も遠い場所であるという意識が強い。ハーフェズはその雅号から察するところ、実際に「コーランの暗記者・朗詠者」であったと考えられ、それゆえ今日では大半の研究者の間で敬虔なムスリムであったと考えられている。しかし、ここでは異教徒であるゾロアスター教徒の寺院を探し求め、ゾロアスター教徒た

ちが売買する上質の酒を求めたいほどにまで、自分の居場所が見つからないと訴えているのである。世の中にはびこる不正・欺瞞に対する激しい憤りの表れである。次の例もそうである。

ハーフェズよ、偽善の弊衣を脱ぎ捨てよ、さもないと命を失う
火はみせかけの寛容という干し草から燃えさかるのだから
（ガザル二八）

このベイトもスーフィーへの軽蔑に裏打ちされている。火というのは、ムスリムにとって最も恐るべき存在であり、通常「地獄の火」のイメージである。外面上の寛容さ・鷹揚さを干し草に譬え、干し草にいったん火が燃え移ろうものなら一瞬の間に炎が燃えさかり、煉獄の火と見まごうばかりとなり、それが弊衣にも飛び火でもすれば命を失いかねない、という忠告である。ハーフェズが自身に呼びかけるスタイルをとっているが、「偽善者の仲間になるべからず」と強くアピールした詩句である。

次の例では、場所やイメージではなく、日常目に触れる道具が効果的に用いられている。

わが心は偽善や敷物の下の太鼓にうんざり
酒場の戸口に旗をたてる方がまし
（ガザル四六二）

「敷物の下の太鼓」というのは、絨毯等の下に娯楽道具を隠すことを示唆すると考えられる。つまり白昼に正々堂々と音楽を楽しむことはせず、こっそりと世間の目を盗んで密かに自分を満足させている人々に対し非難しているのである。「酒場の戸口の旗」というのは、目印であり宣伝でもある。すなわち、隠れてこそこそと楽しんでいるくらいであるなら、酒場の戸口に旗を立てて目印にし、「ここでは皆酒を飲み、楽の音を楽しむことができる」と宣伝した方がよいではないか、というのがハーフェズの意見なのである。次の例ではまた別の道具が登場する。酒壺と竪琴である。

さあ、偽善者どもの欺瞞を見るがよい
酒壺のごとく心は血に染まり、竪琴のごとく叫んでいる
（ガザル三七九）

偽善者が具体的に誰をさすのかは、ここでは明らかにされてはいない。酒壺に入っているのは赤ワインであろう。欺瞞に対する怒りや悲しみで心が真っ赤な血に満ちているさまを、偽善者たちの傍らに常に鎮座している酒壺が赤ワインに満ちているさまに譬え、庶民の悲痛な叫びを偽善者たちの宴で旋律を奏で彼らを楽しませる竪琴の音色になぞらえているのである。

次のベイトでは、偽善者はスーフィーであることが明らかに指摘されている。

スーフィーを倒す酒はどこで売られているのか
私は偽善の禁欲に苦しんでいるのだ
（ガザル四八三）

禁欲を掲げるスーフィーが、真に禁欲でいるならば、問題はな

いのである。しかし、ぼろを纏って外見で庶民を欺く、みせかけの「禁欲」を行うスーフィーを、その禁欲を解く手段として最も適するもの――酒――で酔わせてしまおうとハーフェズはうたっているのである。

このように、ハーフェズは徹頭徹尾偽善を嫌い、メッセージを残してはいるものの、偽善者たちに立ち向かおうといった血気盛んな正義感は前面に押し出しはしない。

われらは偽善者でもなければ偽善の相手でもない
秘密を識り給う神はこれを証明する
（ガザル二五）

ただ、自分の潔癖さを万物の創造主たる神はご存じであるという自信にしっかりと支えられ、それを精神の拠り所としているのである。

次に、オベイド・ザーカーニーの社会倫理への眼差しに注目してみよう。次のルバーイーは、ハーフェズの最初に挙げたガザル（ガザル二）の一節と内容、言葉遣い、押韻といった要素が酷似している。

欺瞞と偽善の巣であるこの庵にはうんざり、酒場は何処
大麻の話もいつも一緒だった酒の話ももうたくさん
（ルバーイー四）

余韻をもたせ、解釈に多少の幅を許したハーフェズの一節と異なり、「神秘主義修行僧たちの集う僧庵は欺瞞と偽善の巣である」と断言している。そして、「そこでは常日頃より大麻の話でもちきり、酒も常備されていた」という事実が盛り込まれているのである。ルバーイーという韻文の形式をとっていながら、事実の暴露と自らの嫌悪感の発露になっているわけである。

では、オベイド・ザーカーニーの本領が発揮されたとされる散文作品では、欺瞞・偽善はどのように描かれているのであろうか。

神秘主義指導者の弟子、偽善者、欺瞞者とは、
誰もがよくご存じの方々　（『十章』より第四章）

神秘主義指導者の弟子と偽善者・欺瞞者が並列におかれていることより、神秘主義指導者の弟子も偽善者・欺瞞者と同類とみなされていたことがわかると同時に、当時の社会の風潮として、偽善者や欺瞞者がいかなる職、社会階層の人々であるかということは、みな周知であったということが推察される。ここで「誰もがよくご存じの方々」と訳出した原語は、ma'rūfatであり、通常悪評高い人々のことをさす。よって、この定義にはかなりの皮肉が込められているとみなしてよいであろう。

ここで偽善者・欺瞞者と表現された人々を、次の散文では具体的に示している。1で見てきた職種以外に、イスラーム法学者や役人にも言及している点に注目されたい。

法学者・シェイフ・説教師・役人の娘を求めるな。もし気づかずに契ってしまったなら、花嫁を…（中略）…して、卑しく、偽善に満ち、無駄口を叩き、不孝で、人の中傷をするよ

うな子供が生まれないようにせよ（『百の忠告』より）

ここでは、当時の社会に蔓延していた許し難い性質や行為が具体的に列挙されている。卑しいこと、偽善を行うこと、無駄話をすること、親不孝、人を中傷することがそれである。オベイド・ザーカーニーがこうした行為・性質に怒りをおぼえたことは理解できるものの、訳出できないほどのあからさまで品格のない表現形態を取っていることに関しては顔をしかめざるをえない。しかしながら、そうした表現をせざるをえないほどの憤りに裏打ちされた結果であるとすれば、それも個人的には十分に理解できるのである。

オベイド・ザーカーニーもハーフェズと同様、偽善を最も嫌っていたであろうことは、次の「男」の定義から明白である。

男とは、偽善を語らぬ者　（『十章』より第一章）

裏を返せば、「偽善・欺瞞の言動をする者は男と私はみなさない」ということである。男たる者、嘘ぶかず、人を騙さず、誠実に生きるべきだと説かざるをえなかったのは、それだけ当時の社会に偽善を語る者が横行していたという事実があったと考えられる。

こうしてみてくると、当時の社会にはびこる邪な倫理観に対し、同じような不安を覚え、それを憂えていたこの二人の文人――ハーフェズとオベイド・ザーカーニー――の表現上の特徴がさらにきわだってくる。ハーフェズは表面上は比較的やんわりと、わかる人に対してのみ、痛烈な批判を下す。一方のオベイド・ザーカーニーは、直接ある階層の人々を歯に衣着せぬ表現で攻撃し、蹴落とすような表現すら拒まないといえる。

そして、前項四の1で見た、特定の階層への非難・怒りというものは、すべてこの二人に共通の「欺瞞・偽善への怒り」という激しい衝動にしっかりと支えられているということが、改めて強く感じられるのである。

五　おわりに

時の権力者の近くで要職を得ながらも、遊び好きで借金に追われていたオベイド・ザーカーニーの痛烈な社会批判は、当時としては人々の目をひく、かなり派手なパフォーマンスであったと考えられる。各社会階層に攻撃をしかけるその姿勢は、陰でひそかなる庶民の支持を得ていたとしても、やはり敵を多くつくってしまったのではなかろうか。没年も埋葬地も何ひとつ明らかでないその理由は、寿命を全うできなかったからではないかとする研究者も存在する。[60] オベイド・ザーカーニーの宮廷詩人的側面が今までほとんど注目されてこなかったのも、為政者たちにとって結果的にありがたい存在の詩人と評価されなかったからではないだろうか。従来より、カスィーダの果たす役割は、君主やパトロンの名声・功績・偉大さを後世の子孫たちに伝えるというものである。したがって、上手に讃えられていることも無論大切であるが、誰が頌を述べたのかということも重要な鍵であったに違いない。一方のハーフェズは、宮廷詩人としてもその名を残し、その廟は今なおシーラーズの観光名

所となり、ガザルは多くの人々に愛唱され続け、人々の生活の中に息づいているのである。[61]

長い歴史の中で、サーサーン朝が倒されて以来、異民族支配を余儀なくされてきたイラン人にとっては、支配層とうまく折り合い、時には取り入りながら上手に世渡りをし生き永らえるという生き方が求められてきたことは、想像に難くない。そのような生き方を強いられてきた人々にとっては、ハーフェズのように、激しい感情を忍ばせながら比較的穏やかな言葉で時に諭し、時に自分も他人も非難するという表現方法を用いることで、結果的に生き延びるという手段のほうが、直接厳しい批判を下して多数の敵を作りその結果自らの命を縮める、あるいは落とすという行為よりも、「生きるための知恵」として支持されてきたのではないだろうか。

一一世紀にイランの地方王朝ズィーヤール朝君主ケイ・カーヴースが息子ギーラーン・シャーのために残した『カーブースの書 *Qābūs-nāme*』という鑑文学がある。人間としての行動の規律をはじめとして、当時の社会に即した処世術を息子に説いたものであり、全四四章から成る。その一三章に以下の文が見受けられる。

冗談は災禍の前駆者。
すべての禍、争いごとの源は冗談を言うことである。冗談に罪科がなくともそれを避けよ。
冗談はよいかもしれないが、他人への非難・中傷は言ってはならない。
ジョークを語るならまじめなことも織り交ぜ、中傷・非難は避けよ。[62]

当時既に「他人への言葉による攻撃は、可能な限り避けるべきであり、やむを得ず中傷せねばならないならば、よほど用心してからせよ」という教訓があった証拠である。戦乱の世を生き延びていくためには、言葉に用心せよという教訓は中世のイランにすでに存在していたのである。

現在、イランの風刺文学研究の対象となる時代は、大抵近現代である。つまり、ごく最近まで風刺文学作品は、社会で流布しなかった、あるいは公にならなかったのである。一四世紀のオベイド・ザーカーニーが、仮にその風刺によって恨みをかい、天寿を全うできないどころか人々に対する見せしめ的な存在になっていたと仮定するならば、その後一九世紀に至るまで、風刺文学が文学史上に登場してこなかったのは当然といえるのではなかろうか。

そして、この二人の文人ハーフェズとオベイド・ザーカーニーは、同時代の人間として互いに共感できる部分を持ち合わせながら、互いの表現方法を認めることができなかった――例えば、賢いハーフェズにしてみれば、ストレートな物言いで命を縮めてしまうようなオベイド・ザーカーニーの実直さ・愚かさは耐えられなかったのであろうし、まっすぐで一本気なオベイド・ザーカーニーにしてみれば、勿体ぶった表現方法を用いているようにしかみえないハーフェズを受け容れることはできなかった――のではないだろうか。こう考えてくると、互いの作品の中に、相手の名前すら出てこなかった理由もわかるように思える。

社会の欺瞞や偽善に対する憤りを同じように感じていながら、その表現方法如何で各人の運命が全く違う方向へ向かってしまったのだとすれば、そこから現代に生きる我々が学ぶべきところも多いのではなかろうか。

註

1　この論考は二〇〇二年一〇月二〇日に開催された日本オリエント学会第四四回大会で「ハーフェズとオベイド・ザーカーニー――その社会風刺の手法を中心に――」と題して発表した内容に加筆・修正してまとめたものである。また、本論考全体は、Moḥammad Ja'far Mahjūb: *Kolliyāt-e 'Obeyd-e Zākānī*, New York, 1999（最新のオベイド・ザーカーニー研究）に基づいている。

2　『選史』は、オベイド・ザーカーニーと同郷・同時代のハムドッラー・モストウフィー Ḥamdollāh Mostowfī が、A.H.七三〇／一三二九年に著した史料であり、執筆された年代から判断して最も信憑性が高いとされている。しかしながら、オベイド・ザーカーニーについての記述はわずか一、二行に留まっている。

『詩人伝』には、ジャハーン・マレク・ハートゥーンという同時代の女流詩人とオベイド・ザーカーニーとの逸話が収められており、興味深いものの、著者であるドウラトシャー Dowlatshāh の記述全般については、作り話が多いという理由から、ペルシア文学研究者の間で信用に値しないという評価が下されている。ジャハーン・マレク・ハートゥーンについては、拙稿「ハーフェズの時代の女流詩人―ジャハーン・マレク・ハートゥーンについて―」『ALBA』一九九六年を参照。

アブドッラー・アファンディー 'Abdollāh Afandī 著『賢人たちの園』は、ハーフェズとオベイド・ザーカーニーの時代に関して大きな誤りがあるが、オベイドの『定義』に触れるなど貴重な記述も多いとされ、研究者たちも注目してきた。

3　当時はスーサンゲルドという呼称ではなく、ハファージェ、もしくはハファージエと呼ばれていた。

4　*Kolliyāt-e 'Obeyd-e Zākānī*, ガザル一二〇の中にこううたわれている。他の人々に圧制と残酷を強いるとしても、オベイドッラー・ザーカーニーには酷くあたるな

5　*ibid.*, カスィーダ三〇。

6　ハージ・ホセイン・アーガー・マレク Ḥāj Ḥoseyn Āqā Malek の蔵書。アリーシャー・イブン・モハンマド・イブン・ガーセム・ハーラズミー 'Alīshāh b. Qāsem Khwārazmī 編で、各章を「枝 shajare」として、その各章がさらにいくつかの「果実 ṣamare」に分かれるという構成の天文学書である。

7　*Kolliyāt-e 'Obeyd-e Zākānī*, カスィーダ一。

8　カスィーダの数は四一作品、計一〇〇九ベイト（対句）である。

9　ガザルは一三九作品あり、合計一〇二七ベイトにものぼる。

10　カトエは全部で二八作品、一五〇ベイト残っている。

11　タルジーバンドは一作品、タルキーブバンドは四作品残っている。

12　ルバーイーの数は五八作品、一一六ベイトである。

13　以下ハーフェズの作品として紹介する作品は、ずべてハーンラリー版に依拠する。ed.by Parviz Nātel Khānlarī: *Dīvān-e Ḥāfeẓ*, Tehran, 1973, pp.1034-1039.

14　ガザル一六四、二〇七。

15　カトエ二四は、アブー・イスハーク王の死去の日付についてうたったもの。カトエ九は。アブー・イスハーク王の宰相たちを称えると同時に王の偉大さをうたいあげたもの。

16　*Kolliyāt-e 'Obeyd-e Zākānī*, p.xxi.

17　*ibid.*, カトエ七、一〇、一二、一四、二四、二六。

18　*ibid.*, pp.60-63.

19　*ibid.*, pp.137-146.

20　*ibid.*, pp.147-182.

21　ジャラーイエル朝創設者のハサン・ボゾルグと後継者スルタン・オヴェイスに仕えた、一四世紀の宮廷詩人。頌詩、抒情詩を多く作詩し

た。

22 物語文学の完成者として知られる、一二世紀の詩人。ハムセと呼ばれる五大長編叙事詩が有名。

23 「インドの鸚鵡」の異名をもつ、中世インド最大のペルシア詩人。

24 *Kolliyāt-e 'Obeyd-e Zākānī*, p.xxviii.

25 オベイド・ザーカーニーの代表作として、イラン人に古くから最も親しまれてきた作品に『鼠と猫 *Mūsh o gorbe*』がある。しかし、この作品は古い手書き写本には含まれていないこと、また本文が不完全であることを理由に、マフジューブ氏はオベイド・ザーカーニーの作品として疑いの眼差しを向けている。

その他、『鳥占いの書 *Fālnāme-ye toyūr*』、『動物占いの書 *Fālnāme-ye vohūsh*』という韻文作品も、オベイド・ザーカーニーの作とするには疑わしいとの見解が下されている。

26 *Kolliyāt-e 'Obeyd-e Zākānī*, pp.201-205.

27 マスナヴィー作品は一八ベイトと一四ベイトの作品が二つ存在し、うち三ベイトはイランの一大英雄叙事詩『王書』をうたったフェルドウスィーからの抜粋・借用である。さらに短いマスナヴィーとして、六ベイトと三ベイトの作品があるが、これもうち二ベイトは一三世紀のロマンス叙事詩人ニザーミーの詩句の挿入である。内容四作品とも猥雑・下品でほとんど評価に値しない。

28 ルバーイーは六四作品ある。個人や集団を揶揄・中傷したものが五作品、社会批判的内容を有するものが六作品、残りはほとんど評価の対象となっていない。

Kolliyāt-e 'Obeyd-e Zākānī, pp.206-217.

29 カトエは六一作品みられるが、とりわけ彼の憧れの詩人であったと思われるサアディーからの引用がここでも目に付く。計六一作品一四五ベイトとなる。

ibid., pp.219-230.

30 *ibid.*, p.xliii.

31 オベイド・ザーカーニーの作として疑わしい散文作品に、『誕生月占いの書 *Fālnāme-ye borūj*』、『風刺集 *Kanzol-Laṭā'ef*』がある。

32 *Kolliyāt-e 'Obeyd-e Zākānī*, pp.231-255.

33 *ibid.*, pp.232-233.

34 それぞれのタイトルは以下の通りである。

一・叡知について　二・勇敢さについて　三・貞節について　四・公平（正義）について　五・寛大さについて　六・温和と威厳について　七・恥じらい、誠実、忠誠、慈悲と憐憫の情について

35 イスラーム諸学を修めた知識人をさす。イスラーム諸学とは、一般に解釈学・読誦学を含むコーラン学、ハディース学、法源学、法学、神学、アラビア語学などをいう。これらを学び修めた人々がウラマーとなったことから、その職業はさまざまであったと考えられる。

36 *Kolliyāt-e 'Obeyd-e Zākānī*, pp.257-296.

37 シェイフ・シハーブッディーン・ガランダル Sheykh Shehābod-dīn Qalandar という托鉢僧が書いた書簡に対し、モウラーナー・ジャラーロッディーン・イブン・ホサーム・ヘラヴィー Mowlānā Jalālod-dīn b. Ḥosām Heravī が返信したとされているが、これらの人物が実在したか、書簡が実在のものか否かは不明である。

38 *Kolliyāt-e 'Obeyd-e Zākānī*, pp.317-324.

39 *ibid.*, p.318.

40 *ibid.*, pp325-330.

41 *ibid.*, p.325.

42 *ibid.*, pp331-340.

43 *ibid.*, p.148.

44 *ibid.*, p.131.135.

45 *ibid.*, p.126.

46 *ibid.*, p.57.

47 *ibid.*, pp.14-15, 49-50, 52-53.

48 *ibid.*, pp.55-57.

49 *ibid.*, pp.127-130.

50 ジャラーイェル朝創設者ハサン・ボゾルグとその後継者スルタン・オヴェイスに仕えた一四世紀の宮廷詩人。カスィーダとガザル作品が多く残されている。他に、スルタン・オヴェイスに捧げた二つの叙事

詩作品『ジャムシードとホルシード』『別離の書』も知られている。

51 *Kolliyāt-e ʻObeyd-e Zākānī*, pp.10-11, 30-32, 35-37.

52 *ibid.*, pp.59-60.

53 *ibid.*, pp.9–10, 47-49.

54 *ibid.*, p.xiii.

55 メフラーブとは、メッカの方角のモスクの内壁にある大きな窪みのこと。通常、アーチ状の形で、装飾が施されている。

56 Moʻīnod-Dīn Abol-Qāsem Jonayd Shīrāzī; ed. by Moḥammad Qazvīnī: *Shaddol-Ezār*, p.200. Tehran, 1328 (1949).

57 アレキサンダー伝説に登場する、生命の水をたたえた泉の番人がヒズルである。

58 レンドには、従来「遊蕩児、放蕩児」という訳語があてられることが多い。筆者の研究によると、「本能にしたがって、時に図々しいほど皮肉っぽく、時につつましく、目先のことにとらわれずに精神的に豊かに楽しく行きようとする生身の人間」といえよう。詳細は拙稿「ペルシア古典文学に見る表象」『総合文化研究』vol.5, pp.63-75, 2001を参照のこと。

59 一二世紀の中央アジア（ペルシア文化圏）で、スーザニーという詩人が韻文で風刺をおこなったのが、ペルシア文学史上では最初といわれている。

60 *Kolliyāt-e ʻObeyd-e Zākānī*, p.liii.

61 ハーフェズと現代イランとの深い関わりについては、『暮らしがわかるアジア読本イラン』河出書房新社　1999年　pp.242-250.（拙著）を参照のこと。

62 Amīr ʻOnsorol-Maʻālī Keykāvūs b. Eskandar b. Qābūs b. Vashmgīr; ed. by Dr. Gholām-ḥoseyn Yūsofī: *Qābūs-nāme*, 1353 (1974), Tehran, pp.96-98.